

# 文学部初等教育専攻での学びとその魅力

青木 聡子

本報告は、2012年11月10日に国土館大学世田谷キャンパスにて開催された人文学会シンポジウム「文学部で学ぶということ―国土館大学の場合」における発表をまとめたものである。なお、報告にあたり、若干の加筆・修正を行ったこととお断りしておく。

## 1. 目的

学生たちは、本学の文学部初等教育専攻で学ぶことをどのように意味づけているのだろうか。とりわけ、カリキュラムの特徴である、体験的・実践的な学び、少数ゼミでの人間教育、全員参加の行事（「運動会」、「音楽会」、「教育雑誌『すくすく』の編集・発行」）の自主的な運営は、学生たちにとってどのような意味をもつのか。学生にとっての文学部初等教育専攻の魅力は何なのか。本報告ではこれらの問いについて、現在、初等教育専攻で学んでいる学生への調査から明らかにしていきたいと考える。

## 2. 方法

### 手続き

2012年7月、本学初等教育専攻の学生を対象に、授業終了時や音楽会の練習時間を利用して調査への協力を依頼した。プライバシーに配慮し、個別に密封できるようテープのついた回収用封筒を添えて質問紙を配布し、研究室前に設けた回収箱に提出してもらった。

### 調査協力者

質問紙を配付した164名のうち、84名から回答が得られた（有効回答率51.2%）。そのうち、1年生は23名（27.4%）、2年生は15名（17.8%）、3年生は22名（26.2%）、4年生は24名（28.6%）だった。

### 調査内容

**学業に対する満足度**（1項目）：初等教育専攻での授業や自習を含めた学業に対する満足度を100点満点で答えてもらった。

**学生生活に対する満足度**（1項目）：初等教育専攻での日々の学生生活に対する満足度を100点満点で答えてもらった。

初等教育専攻における学習環境充実感（17項目）：文学部や初等教育専攻のホームページ<sup>(1)</sup>に本学文学部初等教育専攻のカリキュラムの特徴や卒業生の声として掲載されている情報から学習環境の充実感を問う項目を独自に作成した。「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5段階評定である。

学びのスキル（18項目）：大学で主体的、能動的に学習するために必要とされるスタディ・スキル<sup>(2)</sup>を参考に独自に作成した。「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5段階評定である。

その他：学年、学生生活についての相談相手、個人的な事柄についての相談相手について答えてもらった。

自由記述：「あなたが初等教育専攻に入ってよかったと思うことがありましたら、できるだけ具体的に教えてください。」「あなたは国士舘大学に入学してからの学生生活で、どんなことを学んできましたか。授業に限らず、ためになったこと、将来役立つと思うこと、国士舘大学に入学する前と現在とでご自身が変わったと思うことなどがありましたら教えてください。」「初等教育専攻のここが変わればもっといいと思うこと、大学や教員への要望・提案がありましたら、教えてください。」の3つの問いについて自由記述での回答を求めた。なお、調査ではこのほかに伊藤・相良ほか<sup>(3)</sup>の主観的幸福感尺度（SWBS：Subjective Well-Being Scale）についても尋ねているが、今回は紙幅の都合で報告を割愛させていただく。

### 3. 結果と考察

#### 1. 学生生活や個人的な事柄についての相談相手にみる学生の人間関係

全84名中、学生生活については、83名（98.8%）、個人的な事柄については80名（95.2%）の学生が、専攻内外に1人以上相談できる相手がいると回答した。学生生活の相談相手を複数回答で選択してもらったところ、家族46名（54.8%）、初等教育専攻の先輩33名（39.3%）、初等教育専攻の同級生76名（90.5%）、担任17名（20.2%）、担任以外の教員20名（23.8%）、学生主事21名（25.0%）、その他20名（23.8%）という結果となった。個人的な事柄の相談相手については、家族53名（63.1%）、初等教育専攻の先輩25名（29.8%）、初等教育専攻の同級生68名（81.0%）、担任8名（9.5%）、担任以外の教員9名（10.7%）、学生主事6名（7.1%）、その他29名（34.5%）であった（複数回答）。

学生や新任教員は、教育現場で困ったことがあっても、遠慮や自分で解決すべき課題なのではないかという気持ち<sup>(4)</sup>、無能だと思われるのではないかという恐れ<sup>(5)</sup>から、しばしば周囲に相談できずに問題を抱え込むことがあることが指摘されている。今回の調査では具体的な相談内容にまでは踏み込んでいない点、また、就職した際の相談事は必ずしも学生である現在の相談事と同じとは限らな

い点に注意する必要があるが、多くの学生が相談したいことや困ったことを打ち明けられるような人的資源を有しているという今回の結果は、現場に出てからも必要な人間関係形成力がある程度高いことを意味しているといえるだろう。

## 2. 初等教育専攻における学習環境充実感と初等教育専攻に入ってよかったと思うことにみる初等教育専攻の魅力

ここでは、初等教育専攻における学習環境充実感についての記述統計量を確認したのち、初等教育専攻に入ってよかったと思うことについての自由記述を分析することにより、学生にとっての初等教育専攻の魅力を明らかにしていく。

### 初等教育専攻における学習環境充実感

表1は、初等教育専攻に対するイメージと学習環境についての各項目の記述統計量を示したものである。各項目について1～5点の5段階評定で尋ねたところ、 $M = 3.09 \sim 4.39$ と、項目により値にややばらつきがみられた。また、全17項目のうち、「同級生との横のつながりがある。(項目1)」、「先輩・後輩との縦のつながりがある。(項目2)」、「教育関係のボランティアを探しやすい環境である(項目15)」では天井効果が懸念される結果となった。

表1 初等教育専攻における学習環境充実感

No.	項目	N	M	SD
1	同級生との横のつながりがある。	83	4.39	.922
2	先輩・後輩との縦のつながりがある。	83	4.16	.969
3	授業や研究上のことで、教員に質問したり、討議したり、相談したりしやすい。	83	3.77	1.004
4	授業や研究以外のことで、教員と話したり、相談したりしやすい。	83	3.37	1.176
5	教員免許状取得のための学習支援を十分に受けられる。	82	3.61	1.015
6	授業(講義・実験・実習・演習)を受ける上で必要な教室・機材等の設備が充実している。	83	3.65	1.076
7	教員採用試験対策のための講座等が充実している。	82	3.09	1.080
8	教育の基本となる方法や技術を身につけることができる。	83	3.57	.926
9	体験的・実践的な学びができる機会が充実している。	83	3.49	1.119
10	幅広い教養を身につけることができる。	83	3.17	1.091
11	魅力ある人間としての徳を育むことができる。	83	3.22	1.013
12	音楽会の自主的な運営経験が、就職してから役に立つ。	83	3.55	1.118
13	運動会(音楽会との隔年開催)の自主的な運営経験が、就職してから役に立つ。	82	3.57	1.133
14	教育雑誌『すくすく』の自主的な運営(執筆・編集・発行)経験が、就職してから役に立つ。	82	3.34	1.033
15	教育関係のボランティアを探しやすい環境である。	82	3.99	1.060
16	図書館・メディア情報センターのサービスが充実している。	83	3.55	1.062
17	パソコンやインターネットを使える環境が整っている。	83	3.49	1.130

## カテゴリーの作成

つづいて、「あなたが初等教育専攻に入ってよかったと思うことがありましたら、できるだけ具体的に教えてください。」という問いについての自由記述部分を取り上げる。まず、内容毎に1枚のカードに記し、カードに記された内容が類似しているものをまとめ、まとめたカードを代表するようなカテゴリー名を考えた。初等教育専攻に入ってよかったと思うこと

表2 初等教育専攻に入ってよかったと思うこと

---

①学生間や学生と教員とのつながりがあること (39名)
人数が少ないので先輩や先生から教員についての話を聞くことができること。(1年生)／先輩たちとのつながりが多い！みんな仲良くていい！(1年生)／この2年生に出会えたこと、先輩、後輩に出会えたこと、先生に出会えたことがすごい自分の中でプラスになっています。何より友との出会いが一番です!!(2年生)／他の学部とちがって先輩や後輩などの顔見知りがたくさんできた。(2年生)／先輩や後輩、先生との関わりが深いのでいろいろな相談ができる。(3年生)／他の大学や専攻に比べ縦や横のつながりがあり、たくさん情報が入ってきたり、切磋琢磨したりすることができる。(3年生)／先輩との関わりが深いので、色々なボランティアや活動を紹介してくれること。(4年生)／同じ学年で遊びに行くなどとても仲が良く、横のつながりがあること。授業のことで分からないことがあると、全体で教え合うことが多く、とても良いと思う。(4年生) ほか
②行事があること (12名)
運動会や音楽会など、自らが計画し、実践するという行事が学年関係なく協力し合っていることが、就職してからも絶対役に立つと思うし、学校生活も充実できて良いと思う。(1年生)／運動会や音楽会を行うことで縦のつながりも増えて学校が楽しいです。(2年生)／運動会や音楽会の運営を自分たちで進めていくことで経験がたまる。(2年生)／音楽会や運動会といった実践的な行事があること。(3年生)／他の学部にはない運動会・音楽会があること。大学になってもこのような行事があることは、個人的に楽しいし、将来教員になったとき、運営する上で役立つと思う。(3年生)／運動会・音楽会・初等向けのサークルなどで、横のつながりだけでなく、縦のつながりも持ったこと。(4年生)／行事があって、すごくてのしい！すごくて達成感がある!!(4年生) ほか
③同じ目標をもつ仲間がいること (9名)
同じ目標をもった友人がたくさんできたこと。(1年生)／自分と同じ夢をもつ友人がたくさん出会ったこと。(1年生)／みんな同じ目標に向かってるので色々話がある。(2年生)／専攻の人の将来に対する意識が高く、夢が同じなので頑張ろうと思えるところ。(3年生)／同じ夢を志す仲間と切磋琢磨することができている。(3年生)／同じ夢をもった人がたくさんいるということ。仲間がいるから、授業や行事を協力してつくることができたと思う。(4年生) ほか
④少人数制であること (5名)
少人数制対応 (3年生)／同学年との関わりが深いところ。(人数が40人前後と適切だから)(4年生)／人数が少ないので手厚く面倒をみていただける。(4年生)／一学年の人数が他学部と違って少ないので、みんなと仲良くできる。(4年生)／少人数制なので、仲間(特に同級生)と仲が良いこと。友達が少なければ、自分の教育観しか持たずに教師になってしまうから。友だちの考えを沢山知れるのはとてもことになる。(4年生)
⑤教員になるための学びの機会が充実していること (5名)
教師になる為のプログラムが非常に多いし、先生とのかかわりも深いので実際の授業像なんかイメージしやすい。(2年生)／現場のことを考えた教育を受けられるのは良いと思う。(2年生)／合格報告会がある。(3年生)／現場での実践力を考えてくれる先生が多いこと(松田先生、小野瀬先生、山室先生、千葉先生 etc.) (3年生)／教材研究をしたり模擬授業をした。(4年生)
⑥教室等の設備が充実していること (5名)
ピアノの練習ができること。(1年生)／初等教育の設備が整っていること。(1年生)／設備がととのっている。(3年生)／理科室、美術室といった施設が充実していること。(3年生)／実習の教室が充実している。(3年生)

---

初等教育専攻に入ってよかったことについて、学生から報告された85の記述について分類を行った結果、6カテゴリーが生成された。各カテゴリーに対応する記述の一部を表2に示す。

①は、学生間の横のつながりや縦のつながり、学生と教員とのかかわりの深さが示されているため〈学生間や学生と教員とのつながりがあること〉とした。②は、「運動会」や「音楽会」など、初等教育専攻の行事についての内容から成るため〈行事があること〉とした。③は自分と同じように幼稚園や小学校の教員を目指す仲間がいるよさについての内容から成るため〈同じ目標をもつ仲間がいること〉とした。④は、初等教育専攻が1学年あたり40名程度の少人数制をとっていることに言及したものであるため〈少人数制であること〉とした。⑤は、教員になった先輩の話を聞くことができる合格報告会や、現場での実践力を身につける機会があることなど、教員になるための学びの機会についての内容から成るため〈教員になるための学びの機会が充実していること〉とした。⑥は、専攻内の教育設備についての内容から成るため、〈教室等の設備が充実していること〉とした。

#### 学生にとっての初等教育専攻の魅力

初等教育専攻における学習環境充実感と初等教育専攻に入ってよかったことについての結果を見てみると、ある程度共通する内容が浮かびあがる。以下では、初等教育専攻に入ってよかったと思うこと（表2）に関する内容を「カテゴリー」①～⑥、関連する初等教育専攻における学習環境充実感（表1）の内容を「項目」1～17と記し、学生にとっての初等教育専攻の魅力について、考察を行う。

まず第一に、学生同士や学生と教員とが親密な関係にあることである（カテゴリー①、カテゴリー③、カテゴリー④、項目1、項目2、項目3、項目4）。これは、単に人数が少ないというだけでなく、授業もクラス全員で受けるものが多く、学業と職業とのつながりがわかりやすい専攻であるため、仲間意識が芽生えやすいこと（カテゴリー③）、「運動会」、「音楽会」、「教育雑誌『すくすく』の編集・発行」といった専攻内の行事の運営があるため、入学直後から、同級生のみならず上級生とも一緒に活動する機会があること（カテゴリー②、項目12、項目13、項目14）も寄与していると考えられる。

第2に、教員になるための学びの機会が充実していること（カテゴリー⑤、項目5、項目6、項目7、項目8、項目9、項目15）である。ただし、「初等教育専攻のここが変わればもっといいと思うこと、大学や教員への要望・提案」には、「教育実習の量を増やしてほしい。（2年生）」、「外国語活動の教育法の授業があってほしい。（4年生）」、「小学校のほうは力を入れているけど、幼稚園希望者への対策が少なすぎると思う。免許がとれると知っているのだから、それを

信じて入学してくる人のためにも、もっと幼稚園教諭になったときに役立つような授業をもっと増やしたほうがいいんじゃないかな?と思う。(3年生)」といった、より実践的な力をつけたいという希望(11名)も寄せられていることは真摯に受け止めねばならないだろう。

第3に、〈教室等の設備が充実していること〉(カテゴリー⑥)である。一方で、「初等教育専攻のここが変わればもっといいなと思うこと、大学や教員への要望・提案」として、自由記述欄には、「ピアノ室が少ない(4年生)」など、ピアノ練習室を増やしてほしいという声(8名)や、「暇な時に居る教室がない!自習室も勉強ができる環境とはとても言えない。(3年生)」など、自習室に関する声(2名)、「初等用のロッカーがほしい。(1年生)」、「パソコンが重い。(4年生)」などの要望も寄せられており、学生の中には、今後さらなる設備の充実が必要だという意見があることも確認された。

### 3. 学びのスキルと学生の国士舘大学に入学してからの自己の学びに対する認識 学びのスキル

表3は、学びのスキルについての各項目の記述統計量を示したものである。各項目の平均点は3.00～3.55であった。今回用いた項目は、標準化された尺度ではないものの、いずれも大学で主体的、能動的に学習するために必要とされるスキルであり<sup>(6)</sup>、入学して半年の1年生であってもある程度身につけていないと授業についていくことが難しいと考えられる。

まず、情報をインプットしたり、自分の中で活用すること、自己表現をすることは得意とは言えないまでもある程度できていると感じている(項目1、項目8、項目11、項目16)ようだが、情報理解の正確さや(項目3)、他者に伝わるようアウトプットをすること(項目2、項目10、項目12)についてはやや苦手意識があることがうかがえる。伝えることに関しては、普段から、授業等を通して、幼児や児童に理解できるような表現をするよう意識する機会が多いと考えられるため、自分に対し厳しい評価をしている可能性もある。こうした力については、これまでも、教科に関する授業や、卒業研究における卒業論文の論述のなかで指導を行ってきている。初等教育を看板に掲げた専攻の特性を考えれば、今後も積極的に発言や発表の機会を設けるなどして、学生が自信をもって情報を発信することができるよう支えていく必要があるだろう。

図書館・情報メディアセンターの活用(項目5)や、必要な資料や文献を検索すること(項目6)については、ある程度できていると感じているようだ。ただし、レファレンスサービスの利用、資料の閲覧・貸出手続き、文献複写依頼、学外の図書館や機関が所蔵する資料の借用、学外の図書館や機関への紹介状の発行スキル(項目4)や、適格かつ迅速な情報収集(項目7)についての得点の低

表3 学びのスキル

No.	項目	N	M	SD
1	わかりやすくメモやノートをとることができる。	84	3.40	.920
2	相手に伝わりやすく回答を引き出しやすい質問をすることができる。	84	3.00	.892
3	本や論文の内容を正確につかむことができる。	83	3.07	.852
4	本学図書館の基本的な利用（レファレンスサービス、資料の閲覧・貸出、文献複写、学外の図書館や機関が所蔵する資料の借用、学外の図書館や機関への紹介状の発行）の方法がわかる。	83	3.08	1.015
5	図書館・情報メディアセンターを十分に活用することができる。	84	3.36	1.025
6	必要な資料や文献を検索することができる。	84	3.46	1.011
7	的確かつ迅速に情報を収集することができる。	83	3.17	.960
8	収集した情報を整理し、活用することができる。	84	3.30	.915
9	アイデアを出し、まとめあげていくことができる。	84	3.26	1.007
10	相手にわかりやすいレポートやレジュメを作成することができる。	83	3.13	1.057
11	自己表現を効果的にすることができる。	84	3.25	.890
12	わかりやすく発表・プレゼンテーションをすることができる。	84	3.17	1.028
13	集団の話し合いの中で、共感できる部分を探しながら、合意形成をすることができる。	83	3.46	.967
14	集団の話し合いの中で、相手と自分の異同を明確にしなが、論を進めていくことができる。	84	3.45	.924
15	グループワークではメンバー間で役割分担をしながら目的を遂行することができる。	84	3.55	.962
16	ものごとを鵜呑みにせず、常に批判的な視点をもって考えることができる。	84	3.37	.979
17	試験では、一夜漬けに頼らずに、確実に覚えて臨むことができる。	84	3.04	1.058
18	自らスケジュールを立て、学習を進めていくことができる。	84	3.17	1.074

さを加味すると、インターネットなどの入手が容易な情報に頼りがちである可能性があることには注意が必要だろう。

ひとりでアイデアをまとめることに比べ（項目9）、仲間と一緒に協力して物事を成し遂げることにはある程度自信があるようである（項目13、項目14、項目15）。これには、授業や行事など、専攻内にグループで活動する機会が多いこと、それらを通じて仲間と協力し合える良好な人間関係を築けていることが関係していると考えられる。

一方、計画的に自分でコツコツと学習を進めることは、やや苦手なようである（項目17、項目18）。ただし、「初等教育専攻のここが変わればもっといいなと思うこと、大学や教員への要望・提案」として自由記述欄に寄せられた、教員採用試験の対策をしてほしいという要望を踏まえると、このことは必ずしも学ぶ意欲がないことを意味するというわけではないようだ。ここでは紙幅の都合で詳細な報告については省略するが、たとえば、「教員採用試験（小学校全科）の流れ、対策法などを大学全体で（大学主催で）やるのではなく、強制参加で、初等の先生方主催で1年生の時に実施してほしい。」（3年生）、「教員採用に向けた授業をもっ

とやってほしい。(教育法規とか) また、西洋教育史は、1年生のときに受講するが、本気で教採に向けるために2年生や3年生くらいに行うことがいいと感じた。とても忘れていない。(4年生)、「教採を視野に入れた授業をやってほしい。3年生の後期くらいにあると意識もあがると思います。(4年生)」など、教員採用対策に関する要望が8名から寄せられている。つまり、学びたいという気持ちはあるが、ペースは教員に作ってもらいたいというのが本音、という者もいるのが実情だといえる。自主的に学ぶ姿勢については学生内からも「大学生が何も考えていない(自発的に学習・行動・計画できない)ので、授業で作業したり活動したりする場面を作ったら良い。(オール座学の授業があるので)(4年生)」という厳しい意見があった。大学生に強制的に既習の内容を復習させるような勉強会や宿題を課すことについては、様々な意見があるだろう。しかし、今後専攻としてどのような立場をとるにせよ、教員は、学生たちに(彼らなりにではあるかもしれないが)学ぶ意欲があるのだということだけは、覚えておかねばならないのではないだろうか。

### カテゴリーの作成

ここでは、「あなたは国士舘大学に入学してからの学生生活で、どんなことを学んできましたか。授業に限らず、ためになったこと、将来役立つと思うこと、国士舘大学に入学する前と現在とでご自身が変わったと思うことなどがありましたら教えてください。」という問いについての自由記述部分を取り上げる。まず、内容毎に1枚めカードに記し、カードに記された内容が類似しているものをまとめ、まとめたカードを代表するようなカテゴリー名を考えた。

#### 学生の国士舘大学に入学してからの自己の学びに対する認識

国士舘大学に入学してからの自己の学びに対する認識について、学生から報告されたのべ60の記述について分類を行った結果、3カテゴリーが生成された。各カテゴリーに対応する記述の一部を表4に示す。

①は、人との接し方に関する内容から成るため〈対人関係スキル〉とした。②は、現場での体験や子どもと触れ合った経験についての内容から成るため〈現場の様子や子どもの接し方〉とした。③は、教員養成に関する内容から成るため〈教員になる上で必要な知識・技術〉とした。

〈対人関係スキル〉(カテゴリー①)には、初等教育専攻内に限らず、ボランティアや部活動、サークル活動等も含めた学内外での人とかかわりから、成長した自分の姿を実感できていることが示されている。つまり、学生は、専攻内の仲が良いからと閉じた関係に甘んじるのではなく、積極的に多様な人々とかかわりをもとうとしており、その中で、社交性や団結力、マナーといった対人関係スキルを身につけているといえるだろう。



表4 学生の国士館大学に入学してからの自己の学びに対する認識

①対人関係スキル (17名)

友達関係。(1年生)／縦との関わり方は、これからも役に立つと思う。(2年生)／ボランティアとかBOPが役立つと思う。国際ボランティアに入ってからだいぶ社会的になった。(2年生)／入学前より社会的になれた。自分の意見を言えるようになった。(部活動の仲間のおかげ)。目上の大人との関わり方を覚えてきた。(部活動での経験を通して)(3年生)／いろんな人と関係をもつことが大切。(3年生)／先パイ、後ハイのつながりの大切さ。4年間、同じクラスで団結力を身につけた。(4年生)／国士館大学に入学し、サークルに入り、違う学部の人とも多く関わり、人とのつながり、まとめる重要さを身につけることができた。人をまとめるのがあまり得意ではなかったけれど、指示を出し、まとまった時の嬉しさを感じることができた大学生活である。(4年生)ほか

②現場の様子や子どもとの接し方 (7名)

小学校へのボランティアをすることで、実際の現場を肌で感じることができ、また、実際の先生方を見てとても勉強になっています。(1年生)／サークルに入って小学生や幼稚園児とふれあえるボランティアができた。(1年生)／部活やボランティアで子どもとの接し方を学んだ。(3年生)／子どもとのふれ合う機会が多かった(ボランティア・サークル)(4年生)ほか

③教員になる上で必要な知識・技術 (7名)

教員になるために必要なことを授業で学べた。(1年生)／指導案等の書き方をなんとなくわかった。将来は教師になる人はほとんどの授業が役に立つと思う。(2年生)／教職教養はとても実践的なものが多く面白い。(3年生)／実践的な授業が将来役立つと思いました。(3年生)／教員になる為の必要最低限の知識を学んだ。(4年生)

〈現場の様子や子どもとの接し方〉(カテゴリー②)からは、初等教育専攻が「教育関係のボランティアを探しやすい環境である(表1、項目15)」というだけでなく、教育現場に出ることに対し高い意欲を持ち、そうした機会を積極的に活用している学生の姿がうかがえる。ボランティアの紹介は、大学や教員を通じてだけでなく、専攻内の先輩・後輩間でも行われており、今後もこのようなルートを大事にしていく必要があるだろう。

〈教員になる上で必要な知識・技術〉(カテゴリー③)については、専攻の特徴がそのまま反映されたといえる。そして、このうちいくつかの回答からは、学生がより「実践的な」内容を将来役に立つ・面白いと感じていることがうかがえる。無論、今回のデータからは、このような意見を持っている者が専攻内にどれくらいいるのかは定かではない。ただ、幼稚園においては、保育実践が複雑で多義的であり、学生が大学で学習した知識・技術をそこに単純にあてはめることができないため、多くの学生が現場で戸惑い、教育の理論と実践とを結びつけることに困難を感じることも指摘されている<sup>(7)</sup>。大学である以上、理論を学ぶことも重要であるが、より一層学生の学びへの意欲を高めるためには、理論がどのように実践に結びつくのかが理解できるように授業を展開することが一つの有効な策なのかもしれない。

#### 4. 学生の初等教育専攻での学業における満足度を支える要因

ここでの統計処理は、SPSS21を用いて行った。

**初等教育専攻における学習環境充実感** 初等教育専攻における学習環境充実感17項目について主成分分析を行った。主成分の寄与率は45.7%と十分な値は得られなかったが、すべての質問項目においてこの成分への因子負荷量が0.40以上であり、そのまま「初等教育専攻における学習環境充実感」とした(表5)。尺度得点は項目の合計とし、得点が高いほど、初等教育専攻における学習環境が充実していると感じていることを示す。

**学びのスキル** 大学での学習に必要なとされるスキル18項目について主成分分析を行った。主成分の寄与率は48.6%と十分な値は得られなかったが、すべての質問項目においてこの成分への因子負荷量が0.40以上であり、そのまま「学びのスキル」とした(表6)。尺度得点は項目の合計とし、得点が高いほど、大学での学習に必要な学びのスキルが身につけていると感じていることを示す。

表5 初等教育専攻における学習環境充実感についての主成分分析結果

No.	項目	第1成分	共通性
8	教育の基本となる方法や技術を身につけることができる。	.766	.587
12	音楽会の自主的な運営経験が、就職してから役に立つ。	.763	.583
10	幅広い教養を身につけることができる。	.763	.583
13	運動会(音楽会との隔年開催)の自主的な運営経験が、就職してから役に立つ。	.752	.566
15	教育関係のボランティアを探しやすい環境である。	.741	.549
9	体験的・実践的な学びができる機会が充実している。	.740	.548
16	図書館・メディア情報センターのサービスが充実している。	.719	.517
11	魅力ある人間としての徳を育むことができる。	.709	.503
5	教員免許状取得のための学習支援を十分に受けられる。	.707	.499
7	教員採用試験対策のための講座等が充実している。	.688	.474
14	教育雑誌『すくすく』の自主的な運営(執筆・編集・発行)経験が、就職してから役に立つ。	.685	.469
6	授業(講義・実験・実習・演習)を受ける上で必要な教室・機材等の設備が充実している。	.659	.435
17	パソコンやインターネットを使える環境が整っている。	.643	.414
2	先輩・後輩との縦のつながりがある。	.530	.281
1	同級生との横のつながりがある。	.509	.259
3	授業や研究上のことで、教員に質問したり、討議したり、相談したりしやすい。	.509	.259
4	授業や研究以外のことで、教員と話したり、相談したりしやすい。	.502	.252
固有値		7.776	
α係数		.924	

表6 学びのスキルについての主成分分析結果

No.	項目	第1成分	共通性
8	収集した情報を整理し、活用することができる。	.849	.448
9	アイデアを出し、まとめあげていくことができる。	.810	.469
12	わかりやすく発表・プレゼンテーションをすることができる。	.808	.446
7	的確かつ迅速に情報を収集することができる。	.792	.324
10	相手にわかりやすいレポートやレジュメを作成することができる。	.783	.322
14	集団の話し合いの中で、相手と自分の異同を明確にしなが、論を進めていくことができる。	.778	.471
13	集団の話し合いの中で、共感できる部分を探しながら、合意形成をすることができる。	.754	.628
15	グループワークではメンバー間で役割分担をしながら目的を遂行することができる。	.741	.720
6	必要な資料や文献を検索することができる。	.686	.656
2	相手に伝わりやすく回答を引き出しやすい質問をすることができる。	.685	.613
1	わかりやすくメモやノートをとることができる。	.669	.428
3	本や論文の内容を正確につかむことができる。	.668	.653
11	自己表現を効果的にすることができる。	.654	.568
16	ものごとを鵜呑みにせず、常に批判的な視点をもって考えることができる。	.608	.605
4	本学図書館の基本的な利用（レファレンスサービス、資料の閲覧・貸出、文献複写、学外の図書館や機関が所蔵する資料の借用、学外の図書館や機関への紹介状の発行）の方法がわかる。	.569	.549
5	図書館・情報メディアセンターを十分に活用することができる。	.568	.370
18	自らスケジュールを立て、学習を進めていくことができる。	.502	.219
17	試験では、一夜漬けに頼らずに、確実に覚えて臨むことができる。	.468	.252
固有値		8.742	
$\alpha$ 係数		.934	

### 学習の満足度を支える要因

ここでは、「初等教育専攻における学習環境充実感」、大学で主体的、能動的に学習するために必要な「学びのスキル」、「学生生活に対する満足度」が「学業に対する満足度」に与える影響を検討するために、Amos21を用いて共分散構造分析を行った。モデルの構成に当たっては、学習の基盤となるであろう「初等教育専攻における学習環境充実感」を独立変数、入学後も上がっていくことが期待される「学びのスキル」を媒介変数、「学業に対する満足度」と「学生生活に対する満足度」を従属変数にし、「初等教育専攻における学習環境充実感」から「学業に対する満足度」へのパスも仮定したモデル1について検証を行った。その結果、モデル適合度が低く（ $\chi^2(2) = 17.698, p < .001, GFI = .900, AGFI = .498, RMSEA = .313$ ）、「初等教育専攻における学習環境充実感」から「学業に対する満足度」へのパスが有意ではなかった。そこで、このパスを削除し、「学びのスキル」と「学生生活に対する満足度」を媒介変数にしたモデルについて検討した。

その結果、モデル適合度も改善され ( $\chi^2(2) = 2.916$ , n.s., GFI = .980, AGFI = .898, KMSEA = .081)、仮定した全てのパスが有意な結果となったため、最終的にこのモデルを採用した (図1)。

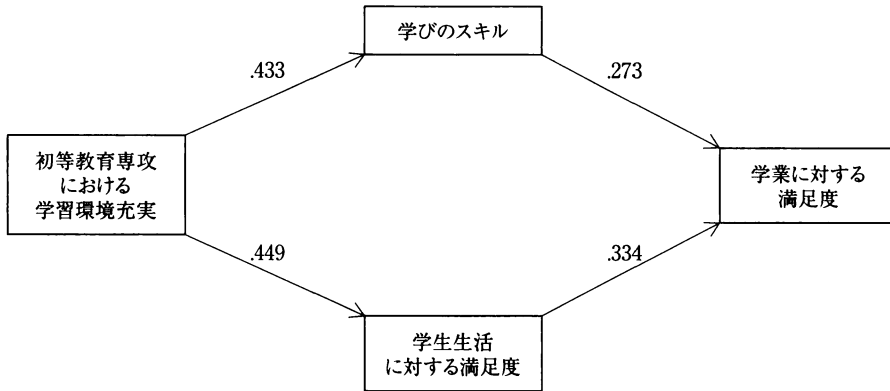


図1 学習の満足度を支える要因

図1に示す通り、初等教育専攻では、人的・物的に充実した学習環境を基盤に、学生の学びのスキルや学生生活に対する満足感が高められ、そのことが、授業や自習を含めた学業に対する満足度につながっていることが確認された。また、「初等教育専攻における学習環境充実感」から「学業に対する満足度」へのパスが直接引けず、媒介変数を通じてのみ効果が確認されたことから、「学業に対する満足度」を高めるには、単に物的・人的な学習環境のよさがあればよいというわけではなく、学生自身に大学で学ぶためのスキルが身につけていて、主体的・能動的学んだり、学生生活にも満足することができていたりして初めてその環境のよさが効力を発揮することが示された。

なお、今回の調査では、「学業に対する満足度」は  $M = 66.11$ ,  $SD = 15.97$ 、「学生生活に対する満足度」は  $M = 74.63$ ,  $SD = 20.60$ であった。無論、「学業に対する満足度」=「教師としての力量」や「学力」というわけではないが、自らの学びに対し満足できること、あるいは、山地<sup>(8)</sup>の言葉を借りるなら「納得感」が得られることは、主体的な学びへの動機づけを高める意味でも必要である。今後は、初等教育専攻の『教職履修カルテ』に示されている「修得・探究すべき教師力」の観点も踏まえ、文学部初等教育専攻で教職を目指す学生が、教員として必要な知識・技能をどの程度修得できているのかというデータとも併せて、学生の学びについて検討していく必要があるだろう。

最後に、本調査の限界についても触れておく。今回の調査ではアンケートの有効回答率が51.2%と低く、初等教育専攻の学生全員の意識が反映されているとは

言い難い。今後は、アンケートが集中しやすい学期末を避けて調査を行うなどの回収率を上げる工夫をする必要があるだろう。また、4年間の学生生活を通じて学びへの意識がどのように変化するのかを明らかにし、就学支援につなげることも今後の課題である。

## 注

- (1) 国士舘大学文学部専攻紹介初等教育専攻  
[http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/Letters/department/education/040100\\_0032.htmh](http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/Letters/department/education/040100_0032.htmh) 2012年6月30日採取
- (2) 「スタディ・スキルとは何か?」、佐藤浩章(編著)、『大学教員のための授業方法とデザイン』pp.63-71、東京:玉川大学出版部、2010年
- (3) 「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」、伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至、『心理学研究』、74、276-281、2003年
- (4) 「学生の保育現場における学びへの支援:学生と教員とのメンタリングをサポートするフィールド・コーディネータの役割と課題」、青木聡子・森下葉子・岩立京子、『東京学芸大学紀要第1部門教育科学第61集』、15-23、2010年／「メンタリングによる新たな保育者養成の可能性を探る:保育者の専門的力形成に向けて」、岩立京子・無藤 隆・福元真由美・塩練裕子・青木聡子・秋田喜代美、『日本発達心理学会第18回大会発表論文集(埼玉大学)』、142・143、2007年
- (5) Coaching and mentoring first year and student teachers 2nd edition. Eye On Education. Podsen, IJ., Denmark, V. M. 2007
- (6) 前掲(2)
- (7) 「幼稚園メンタリングプロジェクトの概要」、福元真由美、『TSC Mentoring Project for Preschool Teachers メンタリングケースブック』、福元真由美(編)、pp. 1-10. 東京:サンプロセス、2008年
- (8) 『学生の納得感を高める大学授業』、山地弘起・橋本健夫(編著)、京都:ナカニシヤ出版、2012年